堺 アルフォンス・ミュシャ館［堺市立文化館］
ミュージアムニュース

ALPHONSE MUCHA MUSEUM *News*

ミュシャ、ムハ、ムッカー師。

CONTENTS

展示報告（2023年4月－2024年3月）
教育普及活動
講座・イベント
館外イベント
主な作品修復報告
作品紹介
コラム
トピック

VOL.13

企画展
01

おいしいミュシャ
5感であじわうアール・ヌーヴォー

会期：2023年4月8日（土）～7月30日（日）

描かれた至福。

シャンパン、ビスケット、タバコの巻紙――。
ミュシャが広告やパッケージのデザインを手がけた商品は、ベルエポックのパリの繁栄ぶりをうかがわせる嗜好品ばかりです。
本展では、こうした「味覚」にまつわるコレクションが一堂に会し、さらに「5感」のテーマのもと、ミュシャが描いたあらゆる「至福」をご堪能いただきました。
各分野のスペシャリストのご協力のもと、さまざまな感覚体験もご用意。
ミュシャ作品は視覚芸術にあたりますが、その枠組みを超えて、19世紀末のパリでミュシャが腕をふるった美の数々を存分にあじわえる展覧会となりました。（M.T.）

タブロイド型ガイドシート『DÉLICIEUX MUCHA PAPER』

ミュシャと「食」、「5感」にまつわるコラムを収録した新聞風のガイドシートをご用意しました。

CONTENTS

- 貴族が嗜む2種類のお酒
- オリジナリティ溢れるミュシャのテーブルウェア
- ミュシャは「5感」を描いていない
- 「5感」に対するミュシャの思想
- CHOCOLATS MASSON
- 飲めばミイラも動き出す
- ミュシャと食べ物 7つのエピソード

企画展関連イベント

おいしさを伝えるテーブルコーディネートレッスン

日　時：5月20日（土）14：00～16：00
講　師：松尾洋子（テーブルコーディネーター、一般社団法人日本テーブルデザイナー協会代表理事）

テーブルコーディネート初心者向けの一日完結レッスン。ミュシャが描いたテーブルウェアの特徴についてのレクチャーや、料理をひきたてるナプキンワーク、フラワーアレンジメント（造花）まで、充実した内容となりました。

シャドウボックスワークショップ

日　時：7月8日（土）14：00～16：00
講　師：瀬戸恵美子（ゆめの小箱 Dream Box代表）

シャドウボックスとは、印刷された絵をパーツごとに重ね、立体的に再現する“触覚”的なクラフトアートです。今回は《果物》または《花》の絵柄にチャレンジ。繊細な作業の末、テーブルに飾りたくなるような完成度の高い作品に仕上がりました。

※他にも、学芸員によるスライドトーク、解説ツアーを実施しました。

限定スイーツ

プティ・フィナンシェ～モエ・エ・シャンドン～

当館近隣の洋菓子店「パティスリー レタンセル」と連携し、本展限定のシャンパン風味の限定フィナンシェを販売しました（税込800円）。かつてミュシャがポスターを描いたモエ・エ・シャンドン社のシャンパン「モエ アンペリアル」を贅沢に使用。オーブンで焼いた後にシロップとともに染み込ませることで、しっとりした味わいに仕上がった逸品は、大変好評でした。

展示構成

「味覚」をはじめとする５つの「感覚」とエピローグでセクションを構成。
ミュシャの絵のイメージがひろがる「感覚体験」もお楽しみいただきました。

Taste Section 1 味覚：おいしさを、あじわう

展示室入口では、大型油彩画《ウミロフ・ミラー》とともにアール・ヌーヴォー風のテーブルコーディネートがお出迎え。その周りにはミュシャが風味によって描き分けたお酒やビスケットのポスター、パッケージ、テーブルウェアのデザイン画がずらりと並びました。 さらに、1896年の「サラ・ベルナールを讃える日」の祝宴メニューの再現パネル展示も。

協力：一般社団法人日本テーブルデザイナー協会、レストラン レ・フレール

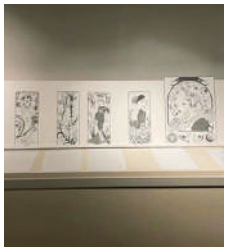
Smell Section 2 嗅覚：香りを、あじわう

ミュシャが描いた香水のためのポスターを紹介するのに加え、ミュシャの絵に着想を得たスペシャルフレグランスを本展のために開発。作品の前に置かれたガラスドームを開けると漂う香りとともに絵のイメージがひろがる展示となりました。

対象作品：《クオ・ヴァディス》《四つの花》
協力：株式会社コードミー

Touch Section 3 触覚：肌ざわりを、あじわう

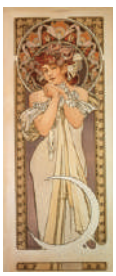
布、器、赤ちゃんなど、肌ざわりのイメージが膨らむモチーフが描かれた作品を、デッサンを中心に展示。また、触れる絵「触図」も設置することで、視覚に頼らない、指先での鑑賞を体験いただきました。



対象作品：《クオ・ヴァディス》《四つの花》《黄道十二宮》
協力：点字・触図工房BJ

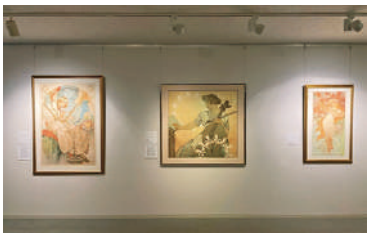
Sight Section 4 視覚：美を、あじわう

19世紀末の多彩な視覚文化のうち、「リトグラフ」「幻灯機」「タブローヴィヴァン（活人画）」に注目し、ミュシャの関連作を紹介。



Sound Section 5 聴覚：音を、あじわう

楽器を手にした女性像を紹介。さらにサラ・ベルナール主演舞台「ロレンザッチオ」の劇中曲を、当時の楽譜をもとにフェニーチェ堺のホールで特別収録しました。展示室内に流れるピアノの調べが、ポスターのイメージをひろげてくれました。



演奏：薄木咲良（ピアニスト、堺市新進アーティストバンク登録アーティスト）

Epilogue おいしいJOB ―当時の大人の嗜好品―

P.07「3F展示」へ ▶

企画展
02

アルフォンス・ムハ モラヴィアン・ドリーム！

会期：2023年8月5日(土)～11月26日(日)

優しい
モラヴィア人画家ムハの
秘められた情熱と
夢のかなえ方

Alfons Mucha

日本ではフランス風の発音ミュシャで親しまれているMuchaの綴りは、彼の祖国チェコでは“ムハ”と発音されます。19世紀末のパリでポスターデザイナーとしての成功をつかんだムハの作品は、“ミュシャ・スタイル”と呼ばれパリの人々を惹きつけながらも、自らはスラヴの民族衣装に身を包み、心にはやがて「芸術の力で祖国チェコとスラヴ民族の団結に貢献したい」という画家としての壮大な夢が芽生えます。それは後に畢生の大作《スラヴ叙事詩》として結実しますが、ムハの中で《スラヴ叙事詩》という夢がどのように膨らんでいったのか･･･。ミュシャ館開館以来24年の歴史の中で初めて“ムハ”のタイトルをつけた本展では、作品の中に散りばめられたムハの夢のカケラを探しながら、ムハの夢を追い、彼の創作の原動力であるチェコやルーツであるスラヴ民族への想いを見つめました。(Y.H.)

企画展関連イベント

ワークショップ
鉄柱入りあやつり人形をつくろう
日時：8月5日(土)13：00～
講師：林由未

チェコ伝統の鉄柱入りの木製人形に、自由に色を塗り、布で衣装を着せてオリジナルのあやつり人形ができあがりました！

ワークショップ
石版画(リトグラフ)ってなあに? 紙平版画を体験しよう
日時：8月19日(土)
①10：30～ ②13：30～
講師：稲田大祐
(相模女子大学教授)

ポスターをつくる版画技法・石版画(リトグラフ)の仕組みを紙を使って楽しく体験しました。

人形劇上演
きんいろの髪のお姫さま
日時：8月26日(土)14：00～
出演：谷口直子(Divadlo501)
美術：林由未

チェコに古くから伝わる民話を人形劇で上演。
１人で10役以上を演じ分けた谷口氏に圧倒。子どもも大人も物語の世界に惹きこまれました。

講演会
Muchaの故郷チェコ♡ 美味しい楽しいチェコバナシ
日時：①9月24日(日) ②10月9日(月・祝)
各日14：00～
講師：スザンカ・ハニバロヴァー

堺在住でマルチに活躍するチェコ人のハニバロヴァー氏による、チェコの文化についての講演会。関西弁で親しみやすい語り口は大爆笑も生まれるほどで、参加者のみなさんも楽しめる講演会となりました。

子ども向けガイドシート
『むしゃむしゃミュシャ』

展示構成　ムハの夢につながる画業の転換期に注目し、作品の変化を感じられる4章に特別コラボレーション1章を加えた全5章での展示構成。

夢のパリ

演劇ポスターをきっかけにパリで売れっ子となっていくムハのデザイナー業をパリでの個展に見立て、挿絵、ポスター、カレンダー、装飾パネル、ジュエリーと多彩な作品で回顧しました。パリの人々に向けて制作されながらも装飾や題材にチェコやスラヴ民族が感じられます。展示壁面はフランスのトリコロールとともにチェコの国旗スラヴ・カラーである赤白青を意識しました。

覚醒のパリ万国博覧会 目覚めた先の夢

《スラヴ叙事詩》制作という夢の芽生えの契機となった1900年パリ万博のボスニア・ヘルツェゴビナ館の壁画制作。チェコと同じくスラヴ民族が多く暮らすボスニアの歴史画を描いたことで、ムハの想いはチェコとルーツであるスラヴ民族へとつのります。貴重な壁画の下絵を通じて、それまでのポスターや装飾パネルとは異なる表現にも注目しました。

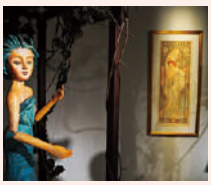
高まるチェコシック 夢を叶えたい場所

パリ万博以降ムハの絵に登場するチェコやスラヴの民族衣装を着た少女たち。《スラヴ叙事詩》構想に欠かせなかったのが、その地を生きる人々の装いでした。国立民族学博物館所蔵の実物の民族衣装とともにムハのデッサンと油彩画を展示しました。精緻なモノクロデッサンの一方、白の中にアクセントとして印象的に民族装飾を描いた油彩画と技法による表現の違いもお楽しみいただきました。

夢を実現した ムハ・スタイル

1918年にチェコスロヴァキアが独立を果たし、1928年にムハは《スラヴ叙事詩》を完成させます。チェコに戻ったムハは作品を発表することで「芸術を通じた祖国への貢献」という夢を実現していきました。独立を喜びながらも、人々の団結を呼びかけるチェコ時代のポスターとともに、現在プラハ市が所蔵している《スラヴ叙事詩》を映像でご覧いただきました。

collaboration!
夢のプラハ 林由未が届ける人形の世界



今回、ムハの作品とプラハ在住の林由未の作品が重なる特別なインスタレーション展示が実現。人形劇の国としても知られるチェコで人形劇舞台美術家・人形作家として夢を叶え、挑戦し続ける林が、ムハの作品から着想を得て制作したチェコの少女と女神たちが生き生きと展示室に舞い降りました。
パリでの成功の中、チェコを想うムハの心に重なるように、植物に囲まれる女神の中を、今にも踊り出しそうな民族衣装の少女たちが来館者を迎えました。絵画と人形、時代を超えてチェコでつながる2人の芸術が導く新たな展示空間をご体感いただけたのではないでしょうか。

※林由未氏については、P.07の特別テーマ展示も合わせてご覧ください。

《同胞のスラヴ》スケッチ 1925-1926年頃　プラハ市立美術館蔵

PICK UP!
幻の水上祝祭劇 《同胞のスラヴ》

チェコの団結を促す国民的行事である第8回ソコル祭（1926年）。その開幕イベントのプロデューサーを務めたムハは、《スラヴ叙事詩》の実演を目指し、プラハを流れるブルタヴァ川を使った壮大な水上祝祭劇《同胞のスラヴ》を企画します。しかし1年以上に及ぶ準備も当日の嵐によって中止を余儀なくされます。幻となったこの祝祭劇について、当館所蔵のソコル祭のポスターと、プラハ市立美術館所蔵の貴重なスケッチの画像を組み合わせてご紹介しました。

同時開催 特別テーマ展示「夢見るヒヤシンス姫とくるみ割り人形」 P.07「3F展示」へ▶

企画展
03

ミュシャとパリの画塾

会期：2023年12月2日(土)〜2024年3月31日(日)

ようこそ
ミュシャの教室へ。

教師——画家のもうひとつの顔。

ミュシャはパリ時代、装飾画家として脚光を浴びる一方で、「教師」としても活躍しました。国籍／性別／年齢／技術を問わないアトリエで、ミュシャはアカデミズムの巨匠に画を学び、また次世代に向けて熱心に画を教えたのです。

本展は、デッサンや下絵を主役に、教師ミュシャの画論を読み解くとともに、直接教えた日本人洋画家の作品も集結。知られざる師弟関係に光を当てる、かつてない機会となりました。(M.T.)

本展公式図録 18ページ(フルカラー) 600円(税込)

ミュシャのデッサン、下絵図版が充実。教師ミュシャの「名言」や日本人洋画家の言葉、相関図や年表、コラムも収録しました。

企画展関連イベント

トークイベント

「ミュシャと堺——こんなところにもミュシャの影」

日　時：1月21日(日)14：00〜15：30
登壇者：矢内一磨(堺市博物館学芸員)、髙原茉莉奈(堺 アルフォンス・ミュシャ館学芸員)

ミュシャと堺に関する4人の人物(与謝野晶子、鹿子木孟郎、吉田初三郎、中村不折)の関係性について、堺市博物館と当館の学芸員が語りました。トークが進むにつれて、点と点がつながり、堺にさまざまなミュシャの「影」を見出すことができました。

ワークショップ

19世紀末パリ風 アカデミックデッサン講座

日　時：2月12日(月・休)
14：00〜16：00
講　師：永津照見(画家、アートデザインスクールito講師)

パステルを使って石膏像を立体的に描きました。絶妙な中間色の用紙に、白と黒で描く手法によって、驚くほどスピーディーに個性豊かなデッサン作品が仕上がりました。

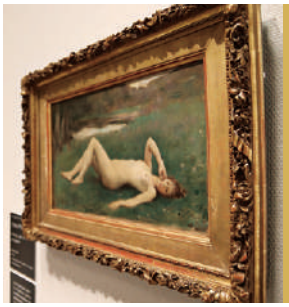
※『堺市博物館研究報告(43号)』の「研究紀要」に、本展に関する論考が掲載されています。　髙原茉莉奈「教師としてのミュシャ パリ1901年・日本人留学生の視点から」

展示構成

本展の舞台は、「パリの画塾」。生徒として画を「学ぶ」側、教師として画を「教える」側というミュシャの２つの視点から展示を構成しました。

第１部　ミュシャ、画を学ぶ

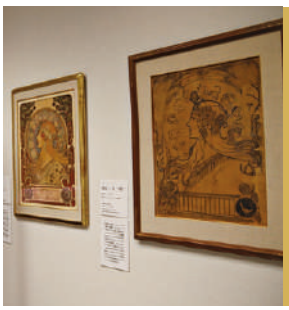
Mucha the Art Student



Prologue

アカデミズムの巨匠 ――ローランスとコラン

画学生時代のミュシャが学んだ２つの画塾でそれぞれ教えていた、ジャン＝ポール・ローランスとラファエル・コランの油彩画を、府中市美術館からの特別出品としてご紹介しました。



SECTION 01

ミュシャのデッサン ――画学生から装飾画家へ

ミュシャの画業初期のデッサンを紹介。装飾画家としての制作過程で描いた下絵は、完成作と並べて展示し、自然のデッサンが、リトグラフ、立体作品、油彩画に昇華される過程をご覧いただきました。

第２部　ミュシャ、画を教える

Mucha the Art Teacher

SECTION 02

ミュシャ講座――教室と書物

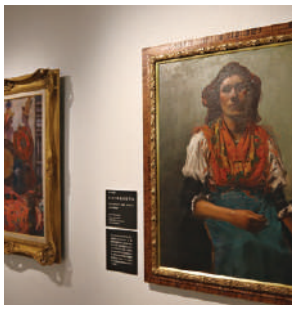
教師ミュシャの軌跡を示す、生徒募集のためのポスターやリーフレットを紹介。また指南書的画集『装飾資料集』を、教師ミュシャが説いた言葉とクロスさせながら紹介。第2弾である『装飾人物集』は、活用法のひとつである「模写」の方法論にもせまりました。

協力：永津照見（画家）

SECTION 03

日本に届いたミュシャ・スタイル

同時代の日本に「ミュシャ・スタイル」が伝来し、インスピレーションを与えていたことを、文芸雑誌『明星』などの事例から紹介。1900年に東京で開催された「第五回白馬会展」に参考出品された《トスカ》は、カルロス・シュヴァーベ《第一回薔薇十字会展》と並べることで、当時の展示を再現しました。



SECTION 04

1901年9月13日(金)――ミュシャと5人の日本人留学生

アカデミー・コラロッシでミュシャが教えた中村不折や鹿子木孟郎といった日本人留学生の作品を、彼らが「ムッカー師」（ミュシャ）について語った言葉とともに紹介。ミュシャが自身の画論を体現した油彩画《ハーモニー》のもとに生徒たちの作品が集い、師弟再会を果たしました。

Epilogue　ミュシャと堺の意外な関係

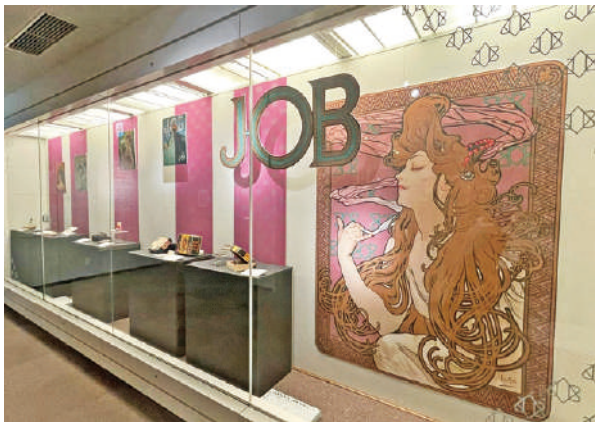
P.08「3F 展示」へ ▶

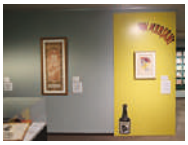
3F展示

企画展 01

企画展「おいしいミュシャ 5感であじわうアール・ヌーヴォー」
Epilogue「おいしいJOB―当時の大人の嗜好品―」

ミュシャがデザインを手がけた嗜好品のなかでも、最も“おいしい”表情をしていると思われるのは、タバコの巻紙のポスター《ジョブ(1896)》ではないでしょうか。ここでは、ミュシャがJOB社のために描いた2枚のポスターを中心に、アール・ヌーヴォー期の画家たちによる同社のためのアートワークが一堂に会しました。また、20世紀にかけて世に送り出されたJOB社の巻紙や灰皿、ローラーなどの喫煙具もあわせて紹介。さらに、タバコとともに19世紀末に熱狂的に支持された嗜好品である「マリアーニワイン」にも注目。これは当時合法だったコカインとボルドーワインを混ぜた飲み物で、数多の著名人が書いた推薦文とともに宣伝されました。そこにはミュシャも含まれており、マリアーニワインのためにミイラ風の女性を描いています。展覧会本編で紹介した商品とはひと味違う、当時の大人の嗜好品の世界をお楽しみいただきました。





企画展 02

特別テーマ展示
「夢見るヒヤシンス姫とくるみ割り人形」

ミュシャがチェコ時代にポスターを手掛けたバレエパントマイム「ヒヤシンス姫」とヨーロッパのクリスマスに欠かせないバレエ「くるみ割り人形」。実はどちらも主人公の夢の中で起こる冒険物語です。ふたつの夢物語を人形作家・林由未の人形がつなぐ特別な展示空間をご覧いただきました。同時開催の企画展「アルフォンス・ムハ モラヴィアン・ドリーム!」と合わせてこれまでにない、ミュシャ作品とのコラボレーション。

入口の幅6mのウィンドーではヒヤシンス姫の登場人物が来館者を出迎えました。そして林由未が2019年から携わる阪急うめだ本店のクリスマスショーウィンドーから、2021年の「くるみ割り人形」を再編成。絵本の中から飛び出してきたような人形たちの世界に子どもたちからも喜びの声が多く聞かれました。

林由未 Yumi Hayashi　プラハ在住　人形劇舞台美術家・人形作家

横浜市出身。大学時代から独自に人形制作を開始する。舞台上での表現をさらに学ぶためにチェコ共和国に渡り、チェコ国立芸術アカデミー人形劇学部舞台美術科大学院にて、ペトル・マターセクに師事。現在フリーの作家としてチェコ国内外で活動。近年は日本でも子ども向けのあやつり人形の絵本の出版や、阪急うめだ本店のクリスマスショーウィンドー他、ミュージックバンド・ヨルシカなどのMVのための人形制作、大学や劇場での講演やワークショップなど多岐にわたって活躍している。

企画展
03

企画展「ミュシャとパリの画塾」

Epilogue「ミュシャと堺の意外な関係」

企画展「ミュシャとパリの画塾」に関連し、
ミュシャと堺の関係について3つのトピックで紹介しました。

1. 与謝野晶子とミュシャの共演？

明治期の文芸雑誌『明星』は、堺出身の歌人・与謝野晶子が活躍した一方、ミュシャ風の挿絵が誌面を飾っていました。

2. 吉田初三郎はミュシャの孫弟子？

堺市博物館が大規模なコレクションを所蔵する鳥瞰図画家・吉田初三郎に応用芸術の道を勧めたのは、ミュシャがパリで直接教えた洋画家・鹿子木孟郎でした。

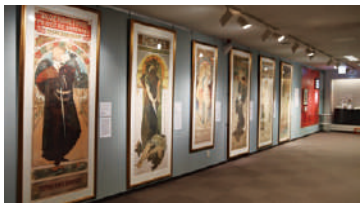
3. 中村不折と堺の芥子餅？

ミュシャに直接学んだ画家・書家の中村不折は、堺銘菓・芥子餅の名店「本家小嶋」の熨斗と包装紙を手がけました。堺をイメージした海辺の風景と千利休の姿が描かれています。

テーマ展示

ミュシャ。Labo #04「文字」

ミュシャを実験的な眼差しで紹介する展示「ミュシャLabo」は、年間シリーズ展として展開した2022年度に続き、不定期開催のテーマ展示として継続することとしました。第4弾のテーマは「文字」。ミュシャの演劇・商業ポスターには、演目名や女優名、商品名やメッセージなどの文字が手書きのレタリングで描かれています。アール・ヌーヴォーの時代の香りをまとった、バリエーション豊富かつ個性的なミュシャの文字の魅力に注目しました。



※ 作品保存の観点から、「ミュシャLabo」の出品作品の多くをレプリカ（複製画）が占めます。

なぞり字

４種類の「なぞり字」シートを設置し、
ミュシャのレタリングをなぞる体験も
お楽しみいただきました。

01. アルファベットと数字　02. お芝居のタイトル　03. サラ・ベルナール　04. 商品名

トピック

- 演劇ポスター …… 情緒豊かなレタリング
- 商業ポスター …… 視認性が高い書体
- ひと言で届ける大きなメッセージ
- 19世紀末の印刷事情
- あえて文字を隠す
- ミュシャのレタリングをなぞってみよう

研究協力

京都の東山高校ロボット研究会「Last Higashiyamars」が開発した、作品鑑賞時の感想投稿・閲覧システム「あるコメ」の運用実験に協力しました。これは来館者が作品の前でスマートフォンを使って感想を投稿・閲覧することで、他者の視点に共感したり、新たな気づきを得たりすることができるものです。「あるコメ」はロボットコンテスト「First Lego League」のために開発され、東山高校は国内予選を勝ち抜き、2月12日に開催された日本大会では総合優勝を果たしました。この結果をうけて4月にアメリカで開催される世界大会への出場が決定しています。

教育普及活動

ミュシャ館ではここ数年、教育普及活動の一環として学校施設へのアプローチを積極的に行っています。2023年度は堺市内の小学校の他、大阪府下の高校や府外の美術科やファッション関係の高校、専門学校や大学など多くの学生のみなさまにご来館いただき、また当館からも学校への出前授業を行いました。

鑑賞教育ツールMu-CUBE

関西大学総合情報学部の堀雅洋教授とゼミ生のご協力のもと開発を進めていた、小学校向けのミュシャ館オリジナルのキューブ型パズルが完成し、7月から鑑賞教育ツールとして貸出を始めました。
ポスター、装飾パネル、書籍、油彩画、工芸品といったミュシャの多彩な創作と当館の主要コレクションを知って楽しめるパズルです。このMu-CUBEと合わせてパズルに採用された作品のタペストリーなども貸出しています。図工や総合の授業に合わせて役立てていただけたらと思います。

Mu-CUBE貸出授業の様子

視覚障害者の方に向けた鑑賞サポート

企画展「おいしいミュシャ 5感であじわうアール・ヌーヴォー」の会期中、市内の「視覚・聴覚障害者センター」と連携し、視覚障害者向けのプログラムを実施しました。学芸員による解説だけでなく、「触図」や「香り」を通じてコミュニケーションを取りながら鑑賞をお楽しみいただきました。また2023年度から、当館の主要コレクションについての点字解説書の貸出も開始しました。

「触図」や「香り」による鑑賞の様子

教員研修

堺市内の小中学校の先生方による、図工部会の研修会が当館で行われました。
当館の成り立ちやコレクションの特徴についての話の後、開催中の企画展を通じて、出前授業で行うような子どもたち向けの解説やギャラリートークを行いました。さらに当館の教育普及活動への取り組みを紹介しながら、先生方と意見交換ができたことで、この研修会をきっかけに2023年度は堺市内の多くの小学校への出前授業につながりました。

出前授業

2023年度も堺市内の小学校へ出前授業を行いました。レプリカを多数持ち込み、“ミニミュシャ館”を作っての鑑賞や、タペストリーを使ってじっくりひとつひとつの作品を楽しんだりと、小学2年生から6年生まで学年ごと、またそれぞれの学校の雰囲気に合わせて授業を行いました。Mu-CUBEの貸出も決まり、出前授業も増えてきた中で、先生方にもご紹介しやすいプログラム作りも進めていきたいと思っています。

一つの作品をじっくり見て、気になったところを言い合います。

教育機関等での美術館鑑賞をご検討のみなさま

ミュシャ館は、子どもたちの美術鑑賞を応援しています。
学校からの団体来館、出前授業やワークショップ他、図工・美術に関わる先生の研修会などお気軽にご相談ください。

MUSEUM LECTURES EVENT

講座

ミュシャ館では鑑賞をより楽しんでいただくために、スライドを使ったトークイベントや、展示室内でのギャラリーツアーを定期的に開催しています。

アニバーサリートークイベント「アルフォンス・ミュシャ 79年の画家人生」

実施日：2023年7月16日（日）
14：00〜15：00

ミュシャの誕生日（24日）と命日（14日）は、どちらも7月です。
このことを記念し、学芸員によるトークイベントを実施しました。フランス、アメリカ、チェコ等で活躍したミュシャの0歳から79歳までの生涯を追いながら、各時代に生み出された作品を、当館コレクションを中心にご紹介しました。

学芸員によるスライドトーク

実施日：2023年4月22日（土）、6月3日（土）、12月17日（日）、2024年3月2日（土）
14：00〜15：00

2022年度実施の年間講座の受講者から、「開催中の展覧会について深く知ることができて良かった」という声を多数いただいたため、2023年度は、すべての企画展の会期中に、各担当学芸員によるスライドトークを行いました。豊富な図版をご覧いただきながら、見どころや作品について解説しました。

学芸員によるギャラリーツアー

毎月実施

各企画展の担当学芸員が、展示室をご案内するイベント。展示のコンセプトやエピソードも交えながら、出品作品の魅力について、なるべくわかりやすくお話ししました。

イベント

ミュシャ館では、アートを気軽に楽しめるイベントを不定期開催しています。
2023年度は、親子を対象としたイベントを開催しました。

「にぎやか鑑賞 3 DAYS おやこでデビュー！ はじめてのびじゅつかん」

実施日：2024年3月1日（金）〜3月3日（日）

美術館がはじめての親子も、にぎやかにアート鑑賞を楽しめる3日間を設定しました。《サラ・ベルナール》の絵柄を使った重ね捺しスタンプラリーや、シールコラージュキットのプレゼント、おやこ向けギャラリーツアーなど、親子で楽しめる企画を多数実施。アートで遊べる休憩室や授乳室、おむつ替えスペースも完備し、美術室デビューをサポートしました。

作品貸出

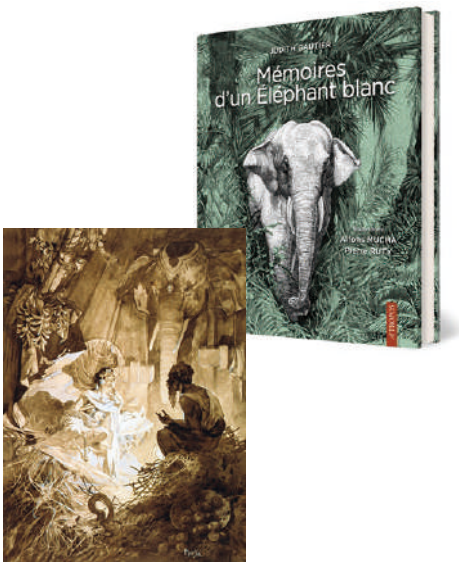
福井県立美術館への作品貸出

「パリに行きたい！」展
展覧会期間：2023年9月15日（金）～10月15日（日）
場所：福井県立美術館

当館からはミュシャの演劇ポスター《メディア》、そして商業ポスター《ジョブ（1898）》と《モナコ・モンテ＝カルロ》の大型作品3点を貸出しました。出品された19世紀末から20世紀初頭のベル・エポックを彩る様々な芸術家の一人としてミュシャの作品も展示され、会場の雰囲気を華やかに盛り上げました。またミュシャ館紹介コーナーも設けられ、多くの来館者に当館を知っていただく機会となりました。

作品画像貸出

ミュシャが挿絵を描いたユディット・ゴーティエ作の書籍『白い象の伝説』（初版1894年）が2023年11月にフランスの出版社（Éditions À PROPOS）から新装版として再出版されました。当館は所蔵するミュシャの『白い象の伝説』挿絵〈下絵〉の画像を貸出し、それらは本書冒頭5ページにわたって掲載されました。



アルフォンス・ミュシャ
書籍『白い象の伝説』（第19章）挿絵〈下絵〉
1893年　墨、水彩、紙
堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市）蔵

連携イベント

ソフィア・堺 プラネタリウム上映

「ミュシャとたどる星空」

日時：2023年10月7日（土）～12月24日（日）
場所：ソフィア・堺 プラネタリウム
主催：堺市教育文化センター ソフィア・堺 プラネタリウム

ソフィア・堺のプラネタリウムで番組「ミュシャとたどる星空」が上映されました。本番組は星や天体にまつわるミュシャの作品《黄道十二宮》や《四つの星》シリーズなど、大型スクリーンに映し出されたミュシャの作品画像の解説を聴きながらプラネタリウムを鑑賞できるものです。星とあわせてミュシャのことを知ることができて良かったという声など、本企画は多くの方にご好評をいただきました。

主な作品修復報告

ミュシャ館では修復家と連携しながら約500点の所蔵作品のコンディションを常に把握し、優先度の高い作品から順に修復を行っています。ここでは、修復を行った作品の一部をその内容とともにご紹介します。

アルフォンス・ミュシャ
四季

1896年　リトグラフ、紙
453×629mm
堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市）蔵

2022年度には30点のカレンダーや書籍・雑誌の挿絵、デッサンなど紙に描かれた作品の修復が山領絵画修復工房にて行われました。その中の一点がリトグラフ《四季》です。本作は変色や汚れ、額やマットへの固定方法の状態が悪く、特に作品の四辺に沿って折れ跡や裂け、紙片の波打ちが目立っていました。今回の修復では汚れの洗浄や額装のやり直しに加え、破れの接合および紙に水分を与えて伸展し乾燥させた上で、重石により形状を整える作業などが行われました。

BEFORE（斜光線写真）

AFTER（斜光線写真）

アルフォンス・ミュシャ
装飾資料集

1902年　書籍
470×34×35mm
堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市）蔵

2023年度は4冊の書籍がNPO法人「書物の歴史と保存修復に関する研究会」にて修復が行われました。そのうちの一冊『装飾資料集』は背表紙の破れや表紙のいたみがありました。特にいたみがひどい小口（書物の背の部分を除いた三方の辺）は元の表紙の紙を使って継ぎ、破れている箇所や欠損部分は色をつけた和紙で継ぐ作業などが行われました。

BEFORE

AFTER

作品撮影

作品の撮影は、作品の状態を記録するため、また広報活動のためにも重要です。当館では定期的に博物館資料や美術館作品を専門とする撮影会社に依頼し作品を撮影しています。
2023年度は、ここ数年の修復後に全体撮影がされていなかった作品、また主要コレクションのなかでも長期間撮影記録が更新されていない作品を中心に20点の撮影を行いました。

ARTWORK DESCRIPTION

作品紹介

イヴァンチッツェの地方祭

アルフォンス・ミュシャ
《イヴァンチッツェの地方祭》1912年　リトグラフ、紙
堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市）蔵

1912年に開かれた地方物産展のポスター。イヴァンチッツェは現チェコ共和国東部、モラヴィア地方にある町で、16世紀後半に初めてチェコ語の聖書が印刷された歴史的な土地であり、そこはアルフォンス・ミュシャ生誕の地である。ミュシャはパリでの活躍の後チェコに戻ると、《スラヴ叙事詩》制作の傍ら、チェコや故郷に関わる仕事を積極的に請け負っていた。このポスターも無償で引き受けたとされている。

民族衣装に身を包む2人の少女がイヴァンチッツェを訪れる人々を歓迎しているよう。とくに衣装は、レースや刺繍、色や形態など細やかにモラヴィア地方の特徴を描き伝えている。画面全体に効果的に使われている赤と白はスラヴ民族連帯のカラーでもあるが、民族衣装、モラヴィアの野花で作られたブーケと花輪、教会の塔からたなびくリボンによって華やかさを演出し、お祭り的な雰囲気を醸し出している。

背景にそびえる教会は町のシンボル聖マリア教会である。この教会のすぐそばで生まれ育ったミュシャにとっても、少年時代に多くの時間を過ごした重要な場所である。ミュシャはこの町を題材にした作品の背景には必ずこの教会の塔、そしてツバメを描いている。チェコへ戻ったミュシャ自身の想いが、巣へと帰ってくる習性を持つツバメに託されているのかもしれない。（Y.H.）

あどけなさを残す
少女たちの
少し誇らしげな表情と
ポージングが
微笑ましいです。

リジー

アルフォンス・ミュシャ
《リジー》1901年頃
リトグラフ、紙
堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市）蔵

1901年3月8日（金）の晩、パリのミュージックホール「フォリー・ベルジェール」で特別なパフォーマンスが披露された。ミュシャの絵に描かれた情景を、衣装を身につけた人物が静止した状態で再現するタブローヴィヴァン（活人画）である。この日デビューを飾った「リジー」という女性のために、ミュシャはこのポスターを描くだけでなく、場面や衣装、照明までトータルプロデュースした。

当時の新聞によると、ミュシャの複数のリトグラフ作品が再現され、それぞれの場面は、田舎風で優雅、厳かでゴージャス、ポエティックで寓意的…といったように転換されたという。またその色彩は、まばゆい金色と藤色、あるいは空色とユリのような白色といった配色で彩られていた。場面ごとに若手作曲家アンリ・ヒルシュマン（1872-1961）による付随音楽も演奏される中、リジーは彫刻のように繊細で美しいポーズをとり、観客を喜ばせた。

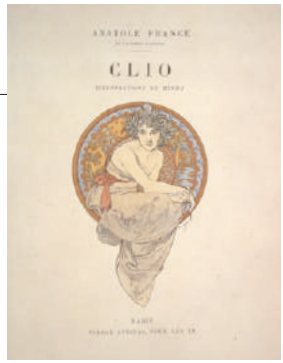
ただ、その場にミュシャの姿はなかった。前日、何らかの事情でブダペストに居たミュシャは、自分の「夢」が叶う瞬間に立ち会えないことを残念がりながらも、成功を確信している、とリジー宛の電報に記している。（M.T.）

ミュシャの絵を演じる
「活人画」、想像するだけで
ワクワクしませんか？

クリオ

ミュシャは1897年にフランスの小説家で批評家のアナトール・フランスの著書『クリオ』の挿絵を描き、本書は1900年に出版された。扉絵のデザインは背後に円形の装飾を施したミュシャおなじみの女性像である。円の中のモチーフは本書に収められたそれぞれのお話を象徴するものである。挿絵はシャープな輪郭線で明確に描かれ、色彩は華やかではあるが、印刷物に適するように紙面に対して隙間なく均質な色使いで着色されている。そして挿絵は装飾のないシンプルな枠内に収まり、本文とは完全に独立した形式で描かれている。

本作とは対照的に、同年ミュシャは文章と挿絵を有機的な装飾で融合させたアール・ヌーヴォーの代表的書籍『トリポリの姫君イルゼ』を制作した。ここから分かることは、おそらくミュシャが話の内容や注文主の要望などに応えて、それぞれの意図に合致する様々な形式の挿絵を自在に描き分けていたことである。（Y.K.）



アルフォンス・ミュシャ
『クリオ』（扉絵）1900年　書籍

アルフォンス・ミュシャ
『クリオ』（挿絵）1900年　書籍

アルフォンス・ミュシャ『トリポリの姫君イルゼ』
（仏語版）（挿絵）1897年　書籍

3点すべて堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市）蔵

多様なミュシャの
挿絵の魅力に注目です。

COLUMN

コラム

「ミュンヘンの青春
―シュクレータ・クラブ」

シュクレータ・クラブのメンバー、ミュンヘンにて：帽子をかぶった横顔の人物がムハ

パリを沸かせたポスターデビューからわずか2年で初の本格的な個展を開催した時、ムハ（ミュシャ）がその宣伝ポスターに描いたのは、パリの人々を魅了した、舞台で輝く女優像でも、商品の世界へと誘う女性像でも、自然と一体となった女神像でもなく、鋭い眼差しを向けるチェコ・モラヴィアの少女だった。モラヴィアの刺繍が施された帽子にモラヴィアの野に咲くヒナギクを飾り、絵筆で描いた重なる輪（和）でポスターを通じてムハはメッセージを伝えたのである。「Alphonse Muchaはチェコ人であり、スラヴ民族の連帯を願う画家である」と。

《サロン・デ・サン：ミュシャ作品展》
1897年　リトグラフ、紙
堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市）蔵

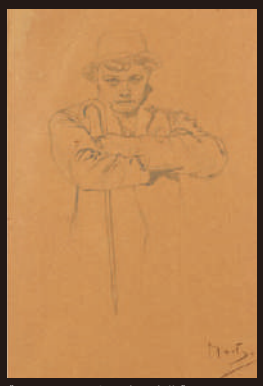
パリにいようと、《スラヴ叙事詩》を夢見る前であろうと、ムハの中ではチェコ人としてのアイデンティティはゆらぎようがないものだった。しかしそこは深淵なる部分として後年のチェコ時代特有のものとして括られがちである。そこで今回は、チェコ人芸術家としての精神的支柱に大きな影響を与えたであろう、画家を志したムハが過ごしたミュンヘンの画塾での青春時代にスポットを当ててみたいと思う。

パリに出る前、ムハは2年間ミュンヘン美術アカデミーに在籍している。ムハが入学した1885年、ミュンヘンにはプラハから多くのチェコ人画学生が移ってきていた。その理由はオーストリア＝ハンガリー帝国からの独立と民族復興運動が高まる中、チェコ人教師を採用しないアカデミーに反発したプラハの画学生たちが帝国外のミュンヘンに集まってきていたからである。さらに彼らはロシア、ポーランド、セルビア、ブルガリアなど同じスラヴ系の画学生とともに「シュクレータ・クラブ」（17世紀のチェコの画家カレル・シュクレータが由来）という芸術グループを結成する。クラブは「チェコ人、スラヴ人の芸術におけるアイデンティティを確立する」という目的のもとに展覧会、雑誌の発行、討論会の活動を活発に行っていた。ムハは入学後すぐにシュクレータに入ると、ウープルカ、マシェック、マロルド、ヴィドホフという生涯の友と出会う。ムハは雑誌『パレット』の編集者を務め、2年目には会長に選出されている。アカデミー近くのムハの下宿先（アトリエ）がたまり場になっていたようで、後にその頃を回想し、「いつも誰かがモラヴィア民謡を歌い出し、私もギターで伴奏に入り一緒に歌った。」と語っている。ムハは熱い祖国愛と芸術に情熱をそそぐスラヴの仲間をミュンヘンで得たのだ。

数少ないミュンヘン時代の作品の中で大作とされるのが、アメリカ・ノースダコタ州のピセク教会の依頼で描かれた祭壇画《聖キュリルと聖メトディオス》である。ピセク教会はムハと同じイヴァンチッツェ出身者が多く移住したチェコ人開拓地にあり、描いた2人は、スラヴ文字を作り、スラヴ語での礼拝の形式を整えたスラヴ世界ではもっとも重要な聖人である。この時すでにムハはスラヴの歴史画を描いている。

2年でミュンヘン美術アカデミーを卒業したムハは、シュクレータの仲間たちとパリに出ると、歴史画家を目指し、アカデミー・ジュリアン、コラロッシとさらに画塾で腕を磨くわけだが、ムハはヴィドホフから贈られたスラヴの民族衣装に身を包み、デッサンの練習のモデルはチェコ人の友人に頼んでいた。毎日のランチはチェコ人夫妻が経営するレストランに通いチェコ語で英気を養うことで、午後からの課題と制作に取り組んでいたという。

ムハが生まれた19世紀末のチェコは、そもそも数百年にもおよぶオーストリア帝国施政下からの独立を望む、民族復興運動の最盛期である。ムハも政治活動のためのパンフレットや、演説会場の装飾を手伝っていたので、多感な少年時代をその熱気の中で過ごしていたことは十分に祖国愛を育む環境にあったといえる。しかし、熱きシュクレータの仲間との出会い、そして彼らと過ごした異国での青春こそが、創作表現とチェコへの想い、さらには民族復興を結びつけ、「芸術を通じた祖国への貢献」という芸術家ムハの支柱を確かなものにしたのではないだろうか。（Y.H.）



《パリのチェコ人画家の肖像》
1892年　鉛筆、紙
堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市）蔵：
チェコ人の友人をモデルにしたムハのデッサン

トピック

撮影日：2024年2月21日

クラウドファンディングプロジェクト

「ミュシャ×堺緞通（さかいだんつう）」

堺 アルフォンス・ミュシャ館では2021年度、当館が所蔵する大型油彩画《クオ・ヴァディス》の絵柄の絨毯を、大阪・堺の伝統技術「堺緞通」で織り上げるプロジェクトを立ち上げました。クラウドファンディングで集まった寄付金をもとに、現在、その技術を継承する大阪刑務所内で製織作業を行っています。2024年2月末の段階で、全体の約62%が完成しています。完成品は、2025年4月開幕の企画展「クオ・ヴァディスの謎（仮）」で、油彩画とともに展示を行う予定です。

クラウドファンディングサイト
「READYFOR」
プロジェクトページはこちら

ミュシャの実の孫ヤルミラ・ミュシャ・プロツコヴァー氏（左）と
ひ孫キャサリン・ガルシア氏（右）

ヤルミラ・ミュシャ・プロツコヴァー氏ご来館

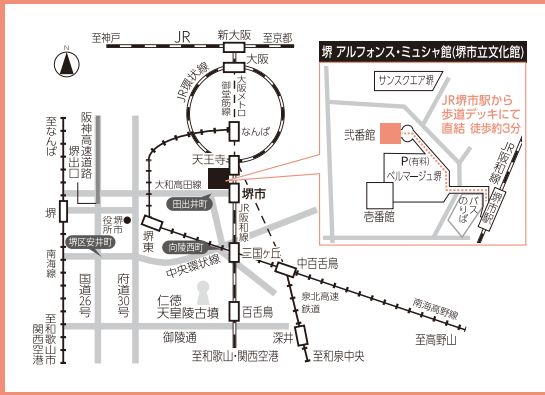
1月21日（日）、アルフォンス・ミュシャの実の孫であるヤルミラ・ミュシャ・プロツコヴァー氏がご来館され、企画展「ミュシャとパリの画塾」を視察されました。ご自身もジュエリーデザイナーとして活躍されていることから、立体作品《蛇のブレスレットと指輪》《ラ・ナチュール》の鑑賞を楽しまれていました。また、ミュシャと日本人洋画家との関わりを示す資料などにも興味を示されていました。

［表紙作品］
アルフォンス・ミュシャ　《サロン・デ・サン：ミュシャ作品展》1897年　リトグラフ、紙
堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市）蔵

執筆・編集　髙原 茉莉奈（M.T.）　原田 悠里（Y.H.）　川口 裕加子（Y.K.）
発行　公益財団法人堺市文化振興財団　堺 アルフォンス・ミュシャ館
デザイン・制作・印刷　株式会社大伸社
発行日　2024年4月1日

堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市立文化館）

開館時間　9時30分–17時15分（入館は16時30分まで）
休 館 日　月曜日（休日や休日の間の場合開館、翌平日休館）、
休日の翌日（翌日が土・日の場合は開館）、年末年始、展示替期間
観 覧 料　詳しくは公式ウェブサイトをご参照ください。
アクセス　JR阪和線堺市駅下車徒歩約3分
JR快速にて・大阪駅から約25分・天王寺駅から約10分
和歌山駅から約60分・関西国際空港駅から約40分



https://mucha.sakai-bunshin.com

590-0014
大阪府堺市堺区田出井町1-2-200　ベルマージュ堺弐番館
TEL 072-222-5533　FAX 072-222-6833

無断で本書の全体または一部を複写・複製することを禁じます。